

# なきごえ



1968

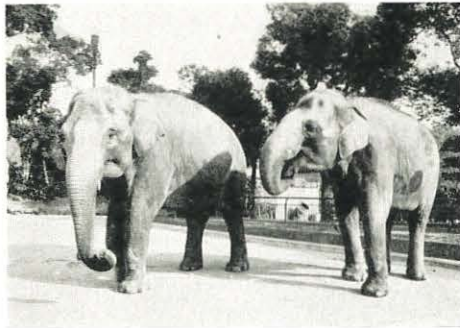
2

大塚 啓  
大塚啓太郎

ぞう

「ぞうさん、ぞうさん、お鼻が長いのね」とかわいい声をはりあげながら、ぞうの動きを一心に目で追っている幼児の姿が、いつもぞう舎の前で見られます。ぞうは幼児から大人まで最も人気の動物です。昨年開園50周年記念の行事の1つとして動物の人気投票をしましたところ、きりんについて第2位に入っていました。どうしてこんな人気があるのでしょうか。気は優しく力持ちを代表している動物だからでしょうか。体が陸上の動物のうちで一番大きく力強いのに、あの目はなんと柔和な笑みを含んだまなざしなのでしょう。ぞうは動物園にはなくてはならない動物です。

日本には現在56の動物園があり、51頭のぞうが飼われています。その大多数がインドぞうで、これはタイ、インドシナ、インド、セイロンに分布していて労役などに使って重宝がられています。これに対してアフリカぞうがいます。インドぞうと違って狂暴である



左 春子 右 百合子

と誤解されて、今まで日本の動物園では飼われませんでした。しかし最近金沢や神戸の動物園に1頭づつ入園し先べんをつけました。欧米の動物園では早くからアフリカぞうを飼育していますから日本の動物園も一歩前進したということでしょう。さて、当園のインドぞうはやや大きくて、キバがでているのが、昭和25年4月に入園した“春子”、やや小さくてきゃしゃな感じのするのが同年6月に入園した“百合子”です。3才と2才でいずれもタイ国からきました。この2頭を迎えた当時の大阪のよい子たちや大人たちの人気は大したもので、ぞうをみようとして陸揚げされた大阪港から動物園までの浴道は何重もの人垣ができた、と当時の新聞が伝えています。

動物園では、毎年5月5日の“子どもの日”にはこれら2頭の成長ぶりを大きな計量機で計って

記録しています。表はその成長ぶりを示していますが、毎年100~200kg程度大きくなっています。インドぞうは生れたときは約100kgで成長すると約4トンにもなります。春子は3才で入園して今年で17年目、20才になったところ。ぞうはおもしろいことに人間と同じ成長を示します。すなわち性成熟年齢が13才で25才になるまで成長し、寿命は69年となっています。ですからまだ成長するでしょう。のっそりして大きく強いはずのぞうも、かなり神経質で夜間飼育係以外の足音にはすぐ目をさまし、立ち上って警戒します。野生のときの本能なのでしょう。

インドぞうの中でも育てかたによって、変な癖がついてお客に鼻水をかけたり、気が荒くて飼育係を寄せつけなかったりしますが、春子も百合子も、のびのびと育てられたのでほんとうに温和です。芸をしこむために、いじめているせいでしょうか。

ぞうは、このように大きくなると寒さにも強く病気にはなりにくいのですが、昨年1月4日には百合子が

水の無いプールに転落して右後肢のひざ関節を強打し、関節炎を起こしてしまいました。ひざは大きくはれあがり、体重をかけることがほとんどできなくなりました。ぞうのように体重の大きな動物では、こうした足の病気で致命傷になるので私たちは大いに心配し、全力をあげて治療にかかりました。抗生物質、サルファ剤や鎮痛剤の注射、湿布など1カ月間ほとんどつきっきりの看病が続きました。その間百合子は食欲の減退や運動不足から急激にやせていきました。2月に入ってやっと治療の効果があがり、少しずつ歩きたしたときは思わずうれし涙がこぼれてしまいました。

(写真と文 樽本勲)

	S 25. 4. 15 入園	S 25. 6. 5 入園
	春子	百合子
昭和25年	kg	kg
30	1,990	1,428
35	2,550	1,920
40	3,440	2,590

さるの飼い方

さるは利口なうえに動作が活発で愛きょうがあるので、ペットとして好んで飼われます。動物商の店先にポケットモンキーとなづけて売られているのは東南アジアから輸入されているかにかくいざるが多く、そのほか、たいわんざるやにほんざるも時々みかけます。

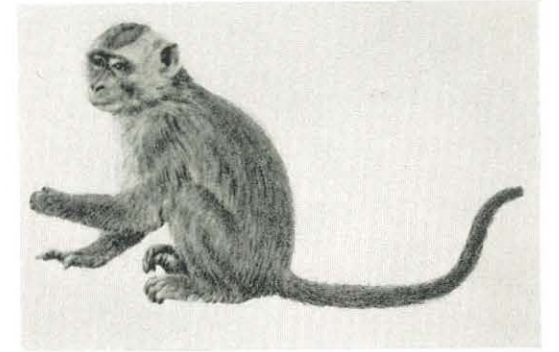
ねだんも1万円位と手頃です。

ここではこうしたさるの飼い方を紹介しましょう。1才くらいの小さいさるは体力が弱いので、日本にやってきて最初の冬はよほど保温に注意しなければなりません。

風邪から肺炎になり死ぬことが多いからです。小さいうちは簡単な木檻でもよいのですが少し大きくなると、やはり丈夫な金網籠か鉄檻を準備しなければなりません。檻は間口1m高さ90cm奥行80cmぐらいの大きさにし、その一部にリング箱大の寝室を設けます。

寝室にはわらや、干草を入れて温かくしてやります。床は金網張りにすると糞や尿が下に落ちて清掃に便利です。夏は風通しのよい場所に置き、直射日光をさけ、冬はできるかぎり日光浴をさせるのがよろしい。

小さい間は寒がるので夜間にはわらの他に湯たんぽを入れてあたたかくしてやります。かにかくい



かにかくいざる

ざるは尾が長く毛が少ないので凍傷を起こしやすいので注意が必要です。

つぎに餌ですが、植物質のものはほとんど何でも食べます。特に、果実は好みますので1日1個ぐらい季節のものを与えるとよろしい。また、他に動物性蛋白質をとります。これは野性のとき昆虫や、小鳥の巣で卵を失敬しているからです。ですから動物質のチーズや牛乳また、だしじゃこ、ゆで卵を与えるのもよく、特に冬はこうした動物蛋白質を多くとらせ、栄養をつけてやって下さい。糞の状態を常に注意して、餌を加減してやるのが飼育のこつです。おわりにこうしたさるも5、6才ともなると、牙がのび、狂暴性をおび、主人以外の人には牙をむいて攻撃的な態度を示します。檻をぬけだして、子供にかみついたというニュースが時々新聞で報道されています。さるは利口でいたずらをしますので、出入口の錠はいつもしっかりとかけて、事故の起こらないように注意しましょう。(樽本 勲)

なきごえ 2月号 もくじ

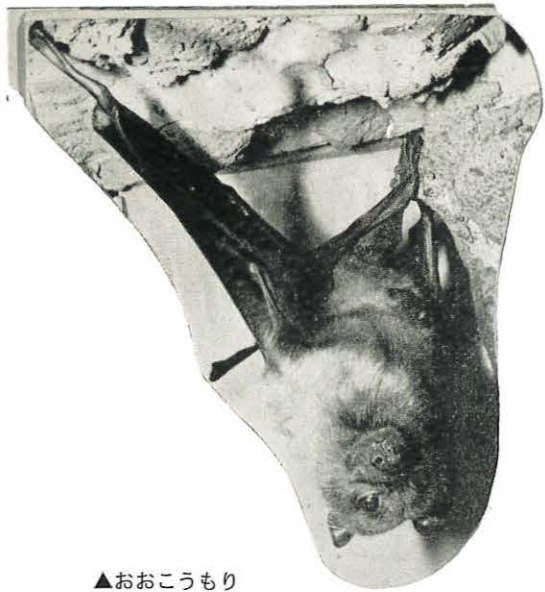
動物の紹介(ぞう) ..... 2  
 飼い方シリーズ(さるの飼い方) ..... 3  
 動物園グラフ ..... 4・5  
 ペットを訪ねて ..... 6  
 動物園ニュース ..... 7

表紙の写真

うに? ではありません“はりねずみ”です。外敵におそわれると写真のようにまるくなって身をまもります。体重850g 元気に育っています。

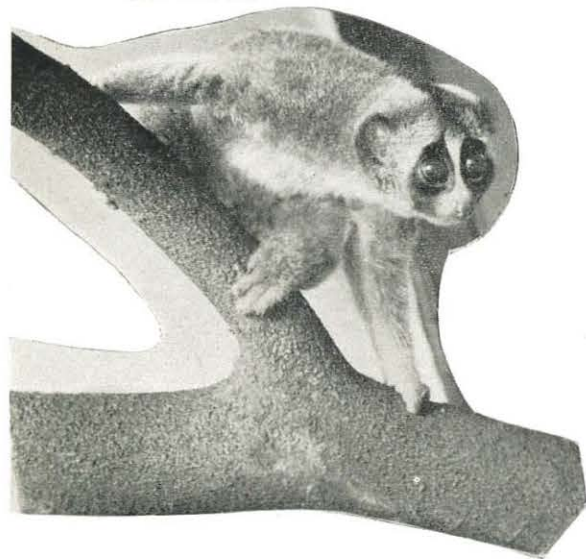
# 動物園グラフ

きびしい寒さが続く今日この頃、熱帯生れの動物たちは、少しばかりの太陽を求めて、あるいは、暖房室の片すみで、ジッと身をひそめて、春の来るのを1日千秋の想いで待っています。そこで今日は、日頃皆さんのお目にかかりにくい動物たちを集めてみました。



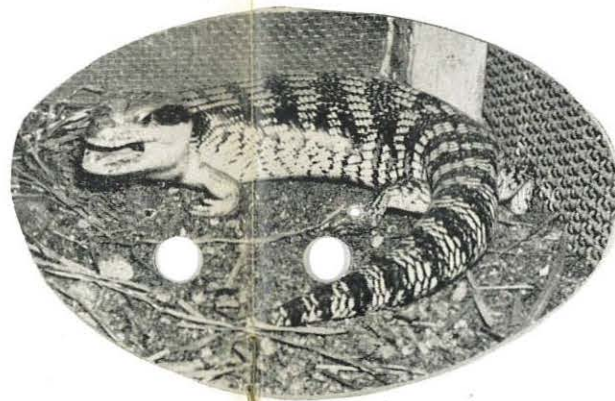
▲おおこうもり  
沖繩や大東島にいるおおこうもりで、果物をたべています(昭38.5.入園)

▼スローロリス  
下等なさるの仲間、夜になるとおきだして小鳥やうずらの卵を食べています(昭37.6.入園)



◀ギャラゴ  
下等なさるの仲間、アフリカのやぶにすみブッシュベビーという愛称がある、夜行性のさるです。(昭37.6.入園)

▶あおしたとかげ  
ニューギニアにすんでいます。あおい舌をペロリと出すのでこの名があります。(昭37.8.入園)



▼ドイツてん  
毛皮をとるために盛んに飼育されています。動物園でもどんどん繁殖します。



▲わたぼうしきぬざる  
頭のとっぺんに、白い長い毛があります。手のひらに乗る小さなさるで、ペットとして飼われています。(昭40.10入園)

▼みずおとおかげ  
ニューギニアから材木を運んできた船の船員さんから、寄附をうけたものです。(昭40.10入園)



## 1月 動物園日記

- 1 動物たちに新年のぞう煮をお祝いしました。今年のエとにあたる馬君とチンパンジー、ぞうなどが動物を代表してぞう煮をお祝いしました。
- 4 ヨーロッパおおかみが何が気に入らなかったのか、仲間どおしけんかを始めました。かもしか園のとからうまが、ニルガイのおすの角でつかれ 20cm 程の裂傷を負いましたので縫合してやりました。
- 5 お正月に人気を集めていたロバさん2頭はドリーム

- ランドに帰されました。
- 8 昨年春にふ化したヨーロッパこうのとりの脚を縮めて治療を続けていましたが、だんだんよくなりました。
- 10 さるアパートのくろざるのめすが、隣のボンネットざると大げんかして右前肢の親指を食いちぎられるという大けがをしました。さっそく治療してやりましたので、元気になりました。
- 12 南園のめん羊舎で、めん羊の赤ちゃんが生まれましたが2、3日続いた雨で親たちにふみつけられて死んでしまいました。
- 13 阿寒中学校から先生がみえて「鋼路のたんちょう」

- の生態をスライドとフィルムを使ってお話下さいました。
- 17 しろくまの駆虫を行ないました。
- 2 番目のめん羊の赤ちゃんが生まれました。元気に育っています。
- 18 ヨーロッパおおかみが交配しました。順調にいくと3月中旬に赤ちゃんが日本で始めて生まれます。
- 19 昨年8月に生まれたビューマの子2頭を親と離して別の檻に入れました。
- 22 とからうまのめすが難産のため死亡しました。
- 23 たんちょうのめすが急に食欲、元気がなくなり総合ビタミン、食欲増進剤など毎日与えています。

- 24 チンパンジーのために大阪市北区富田町の北ちよさんから遊戯道具などたくさんのお物が届けられました。
- 25 南園のにはんしかのおすが他の仲間にいじめられて弱ってきましたので、1時収容舎に入れて治療をすることにしました。
- 26 おおありくいのめすが、右後肢にけがをしたので治療をしました。
- 31 昨年10月生まれのみぎりの赤ちゃんのあごの下が急に腫れだしましたので、診断の上治療を続けております。

## 「犬のおばさん」

吹田市千里山229

逢坂博子さん

最近いろいろの動物をペットとして飼育される方が増えてきました。

珍しい動物をならしたり、身近に飼育することは楽しいことですが、それなりにたゆまぬ愛情と努力をそそぐことが必要です。

ここで紹介する逢坂博子さんは、おちいさいときから、ねっからの動物好きで犬はもちろん、小鳥、インコ類など数多くの動物を手がけられた飼育のベテランです。今では「犬のおばさん」と呼ばれ、110数頭の捨て犬を育てて、それぞれの犬を里親にお世話しておられます。「里親探しが大変でしょう」とお尋ねしたら、「長年やっているのでは良い犬がいたら世話してほしい。という希望者の申込みがあるので、それ程苦労はしません」といって笑っておられました。

逢坂さんの愛情豊かな手で育てられた犬は、犬本来の天性を十分に発揮して新しい飼育者に対しても忠誠なので好評なのでしょう。

逢坂さんは、犬をのびのびと育てるだけでなく、その良さを引出すことの名人かもしれません。

お住まいは閑静な千里山の住宅街で、隣の森が千里寺です。この寺に捨てられた犬が垣根を越えてやって来るともあって、あまりのふびんさから食物を与えたのが動機で、かれこれもう20年になるそうです。「犬を飼うからには、もっと責任のある飼い方をしてほしい。特に計画的繁殖を」というのが逢坂さんの信条です。

犬を運動に連れて行かれるときは、必ず小さなスコップを手にして排便なども埋めるという心使いからも、その行き届いた世話ぶりが伺えます。

「動物が大きくなったから引取ってほしい」という相談を動物園でよく受けますが、このような方はペットを飼う資格に欠けた人です。ペットと



して高価な珍種を飼育することも楽しいことには相違ありませんが、生あるものを飼う以上は、その動物の面倒を終生みてやるということがより必要だと常日頃感じている私には、逢坂さんの言葉には深く感銘しました。犬の飼育上の注意をお尋ねしたら、「やはりジステンパーとヒラリヤ症が最も恐ろしい、これさえ注意をすればまず大丈夫」とのことでした。餌はやはり煮込んだオジャがよいそうです。「世話した犬の中には、どうしても里親の宅から逃げ帰ってしかたがないのもいましてね」といいながらアルバムにいっぱいあってある犬の写真を開きながら、名前を次々にあげて思い出を話される逢坂さんの犬の話題には、つきるところがありません。

対談中ふと私は「へらぶなに始ってへらぶなに終る」という釣師の言葉を思い出しました。逢坂さんの心境は静かな池に糸を垂れている翁の心と何か通じるものがあるのではないかと思います。

これからも、逢坂さんの温かい手によって多くの不幸な犬が救われ、逢坂さんのように犬を正しく飼うことがもっと普及してもらいたいと思います。

またペットとして動物を飼う方々が、それらの動物を中心に楽しい風景が、あちらこちらにみられることを夢みつつおいとしました。

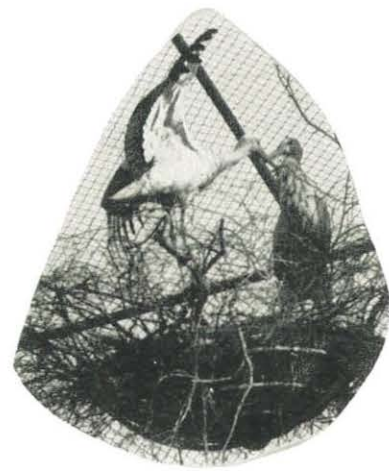
(松岡恵爾)

## 春をまつ動物たち

「カタ、カタ、カタ……」これは一体何の音と意思ですか？

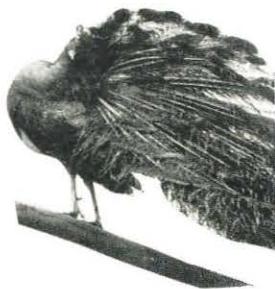
赤ちゃんが押すオモチャの「カタカタ」の音ではありません。

これは水きん放養舎のカロリナポプラの木の上でヨーロッパこうのとりが盛んに鳴いて



いるのです。いや間違いました。正しく言えば鳴いているのではなく、音を出しているのです。というのはヨーロッパこうのとりは普通の鳥のように声帯を使って鳴くのではなく、そのかわりに長くて強いくちばしの上と下を合わせて、このようなおもしろい音をだすのです。

寒い寒い冬の日でも春が近づくと本能的に気づくのでしょうか、少し暖かい日など決まってこのようなかん高い音をだして動物園中に響かせるのです。このような音を響かせ始めると間もなくポプラの木に巣造りを始めます。



この寒気をふっ切るような鋭く響く音を聞きつけて、南国生まれのくじゃくさんも何か始めたようです。

何を始めたのか少しのぞいてみましょう。きらびやかな夜会服のようなご自慢の羽の手入れを始めるのです。お客さんがたくさんやってくる桜の頃までこれから暖かい日には決まって手入れをするのです。このように手入れを欠かしませんから、いつまでも鳥仲間の「女王様」でいられるのかも知れません。

オヤ、くじゃくさんがあんなにせっせと手入れをしているのに、こちらはまあなんとお行儀の悪いマレー



ぐまがおてんとう様に向けてお腹をほっぼりだし、大きな口をだらしなく開け、足を伸ばして昼寝をきめこんでいます。「オイ、コラ」と声をかけてもしばらくたってから、めんどくさそうにうっすらと目をあけて、「ヒトがうたた寝を楽しんでいるのになにをうるさい」とでもいいかげんにして、また目をつぶってしまいます。きっと生まれ故郷のマレー半島の「ココアやしの木」に登り、大好物の「ココアやしの実」でも食べている夢でもみているのでしょう。隣のひぐまは、「万歩動物の“家元”はこちらです」といわんばかりにいたりきたり、きたりいたり忙がしげに歩きまわっています。

池の水に映ったフラミンゴのエlegantな影がゆらゆら揺れています。池の水もぬるみはじめたようです。金魚もゆらゆら泳ぎだしました。

これは吹く風はまだ少し冷たいが、日ざしがやわらかい2月のある日。昼下りの動物たちの表情でした。ほんとうに春は動物園に一足早くやってきたようです。動物園がにぎやかな子どもたちの笑い声でいっぱいになるのももうすぐです。



(山城隆三)

